

マルクス Marx, Karl 1818 ~ 1883

ドイツの経済学者、哲学者、革命指導者、科学的社会主義の創始者。トリーア生まれ。富裕なユダヤ人の家庭に育ち、ボン大学とベルリン大学で法律を学びつつ、歴史・ヘーゲル哲学・フォイエルバッハの唯物論を研究した。

マルクスは急進的な新聞を編集したため、弾圧されてパリ(1843)に、ついでブリュッセル(1845)に住居を移した。エンゲルスを最も親しい同志かつ弟子として、同地で共産主義者同盟を再組織した彼は、1847年にロンドンで大会を開き、『共産党宣言』(1848)を完成させて翌年ロンドンに亡命した。主著『資本論』の第1巻(1867)は、ロンドンの極度の貧困のなかで経済学を研究した結果生まれたものである。

マルクスはエンゲルスとともに、1864年から1872年まで国際労働者協会(第一インタナショナル)を創設し、科学的社会主義の立場から各国の労働運動を指導した。専制政治に反対した彼は、民主共和制、民族的自由の擁護の面でも役割を果たしている。こうしたマルクスの社会科学理論上の最も重要な貢献は、彼の分析の方法(弁証法)であったとされている。マルクスはこの方法によって、あらゆる社会構成体はそれ自体のうちに「矛盾」(不均衡)を生み出す内在的諸力をもっており、この矛盾は新しい社会の建設によってのみ解決される、ということを分析した。

なお、上記以外の主著として『ユダヤ人問題によせて』(1844)、『ドイツ・イデオロギー』(1845~1846、1932年公刊)、『賃労働と資本』(1849)、『フランスにおける階級闘争』(1850)、『経済学批判』(1859)、『賃金、価格および利潤』(1865、1898)、『フランスにおける内乱』(1871)、『ゴータ綱領批判』(1875、1891発表)なども著名である。

Great Books 39 資本論(Das Kapital)

1844年に「市民社会の解剖学は経済学のうちにもとめられなければならない」という結論に達したマルクスは、以来経済学の研究をつづけ、『経済学批判』(1859年)を経て、膨大な研究をもとに『資本論』を著した。『資本論』第1部は、1867年に初版を刊行。その後さまざまな改定が加えられ、90年には第4版が出版された。今日ではこの第4版がひろく底本とされている。第2部、第3部は、マルクスが「最大限に完璧なものを仕上げよう」としたため生前には出版にこぎつけることができず、エンゲルスが残された草稿を整理し、85年に第2部を、94年に第3部を刊行した。

『社会科学総合辞典』(新日本出版社 1992年刊)から引用すると、“第1部は「資本の生産過程」をとりあつかい、商品の分析によって価値の実体と労働の二重性、価値形態と商品の物神性、貨幣の必然性およびその諸機能を解明するとともに、資本主義的生産過程の分析によって剰余価値の実体が労働者の不払労働であることをしめし、資本主義的蓄積の一般法則、資本主義的生産様式の歴史的起源 = 資本の本源的蓄積を明らかにしている。第2部は「資本の流過程」をとりあげ、貨幣資本、生産資本、商品資本の循環、資本の回転を分析するとともに、社会的生産を生産手段生産部門と消費手段生産部門にわけて、社会的総資本の再生産と流通の諸条件を検討している。第3部は「資本主義的生産の総過程」を対象とし、全体としてみた資本の運動過程からでてくる具体的な諸形態がとりだされ、利潤、平均利潤、利潤率の傾向的低下の法則、商業資本、利子生み資本、地代などが分析されている。そして最後に、諸階級とその敵対、そこから必然的に生じる階級闘争をしめし、『資本論』を結ぼうとした。”

マルクスは、『資本論』の方法が唯物論の立場からのヘーゲルの弁証法の適用であることを述べ(第2版「あと書き」)、同時に経済的社会構成体の発展を一つの自然史的過程ととらえる(初版「序言」)という**史的唯物論**の立場を明らかにしている。『資本論』は、W・ペティに始まり、A・スミス、D・リカードを経て頂点に達した古典派経済学を集大成するとともに、古典派経済学を根底から批判することによって、資本主義社会の経済構造を内在的、体系的に分析したものとして、以後の社会科学総体に決定的な影響を与えた。

Key Word 史的唯物論(historischer Materialismus)

社会とその歴史にたいする見方。唯物史観と言う場合もある。マルクスとエンゲルスによって確立された。この見方を「科学」ととらえるか、「方法」ととらえるかに関わる長い論争がある。

『空想から科学への社会主義の発展』(エンゲルス著)は、史的唯物論について これまでのすべての歴史は、原始状態を例外として、階級闘争の歴史であり、歴史を階級闘争の見地にとらえなければならない、たがいに闘争する社会の諸階級はその時代の生産関係と交易関係、すなわち経済的諸関係の産物であること、階級の地位とその相互関係を直接規定する経済的所関係が「現実の土台」をかたちづくっており、各時代の法的かつ政治的諸制度ならびに宗教的、哲学的、その他の見解からなる全体の上部構造は、結局この土台から説明される、と述べた。

マルクスは『経済学批判』の「序言」で、経済の側面だけで歴史をとらえるのではなく、土台の決定的役割をみとめると同時に、歴史をつくる人間の能動的役割、政治やイデオロギーの相対的に独自の歴史的役割を認めている。

◆ Great Books 文献案内

- 📖 資本論 1 ~ 13 / 資本論翻訳委員会(訳)
新日本出版社 1982 ~ 1989年刊 <331.34P / 79 / 1 ~ 13>
- 📖 世界の名著 43 ~ 44 マルクス エンゲルス 1 ~ 2 / 鈴木鴻一郎(編)
中央公論社 1973 ~ 1974年刊 <080 / 5 / 43 ~ 44> 資料番号 12784591 , 12784609
- 📖 資本論 1 ~ 9 (岩波文庫) / 向坂逸郎(訳)
岩波書店 1969 ~ 1970年刊 <I33 / MA / 1 ~ 9>
- 📖 マルクス=エンゲルス全集 第23巻 - 1 ~ 第25巻 - 2
/ ドイツ社会主義統一党中央委員会付属マルクス=レーニン主義研究所(編) 大内兵衛, 細川嘉六(監訳)
大月書店 1965 ~ 1967年刊 <308 / 22 / 23-1 ~ 25-2>

◆ 理解を深めるために参考文献案内

- 📖 資本論を物象化論を視軸にして読む(岩波セミナー・ブックス) / 広松渉(編)
岩波書店 1986年刊 609p <331.34T / 107> 資料番号 12430591
- 📖 人類の知的遺産 50 マルクス / 都留重人(著)
講談社 1982年刊 393, 4p <280.8K / 13 / 50> 資料番号 10497543
- 📖 西欧マルクス経済学論争 / ベン・ファイン, ロ・レンス・ハリス(著) 大島雄一(監訳)
大月書店 1981年刊 230, 15p <331.34N / 70> 資料番号 12430096
- 📖 ケムブリジ資本論争(ポスト・ケインジアン叢書) / ハ・コ・ト(著) 神谷伝造(訳)
日本経済評論社 1980年刊 349p <331.39M / 37> 資料番号 10812501
- 📖 経済原論 1 ~ 2 (宇野弘蔵著作集 第1巻 ~ 第2巻) / 宇野弘蔵(著)
岩波書店 1973年刊 <330.8 / 26 / 1 ~ 2> 資料番号 10799211
- 📖 カ・ル・マルクス(岩波文庫) / レ・ニン(著) 粟田賢三(訳)
岩波書店 1971年刊 361p <I36 / レ> 資料番号 12257580 , 10799229
- 📖 『資本論』研究史 / 遊部久蔵(編)
ミネルヴァ書房 1958年刊 239, 77p <331.3 / 159> 資料番号 10808350
- 📖 いわゆる市場問題について(国民文庫) / レ・ニン(著) 飯田貫一(訳)
国民文庫社 1953年刊 135, 12p <331.3 / 86> 資料番号 10807485
- 📖 資本論入門(青木文庫) / 河上肇(著)
青木書店 1952 ~ 1953年刊 <331.3 / 79 / 1 ~ 5>